

社会科研究部 教科伝達

社会科研究部 西 竜王 下地 治人

1 社会科における「学びをつなぐ」とは

子供が社会的事象との関わりの中で、見えているもの(事実)と未知(教材)をつなぐことで、そのズレから問いが生まれ社会認識を広げ、生活や社会に見られる課題を把握していく。そこで生まれたたくさんの問いから、解決する意味や必要性について、仲間と対話を通して吟味する。そして、問題を解決するために、調べを進めて社会事象について理解し、根拠をもって自分の思いや考えを持ち、仲間と協動的な学びを通して、社会認識を豊かにしていくこと。その学びが、社会科の目標である「平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力」を涵養していくことを「学びをつなぐ」として捉える。

2 社会科の見方・考え方

「社会的事象を、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して捉え、比較・分類・総合したり、地域の人々や国民生活に関連付けたりすること」

3 社会科における「知識・技能」、「思考力・表現力・判断力等」

【知識・技能】	地域や国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活を理解すること・様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめること
【思考力・判断力・表現力等】	社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したり、考えたことや選択・判断したことを適切に表現すること

4 授業づくりのポイント

①問いを見出すカリキュラムデザイン

子供が自ら問いを見出し、それを解決していく中で、新たな学びを見出すことができるように単元を構成する。授業の中で、子供が比較、分類したり選択・判断したりする場面を設けることで、新たな問いが生まれるようにし、子供の問いや思考に合わせて柔軟に学習内容や順番を変えていくようなカリキュラムデザインを行っていく。

②社会課題の解決を考え、社会参画できるカリキュラムデザイン

子供にとって一番身近な地域である実生活とつなぐことで、「社会を知る」という見方だけでなく「社会の課題を考え、社会に参加する」とした目的・内容への工夫を図り、子供が「自分事」として社会を捉えるカリキュラムデザインを行う。

③根拠をもって考える学習

子供が根拠をもって考えるためには、①問いの意味理解、②資料読解、③見学や調査などの体験、④他者との意見交流ができる学習活動が必要になる。それらの学習活動を通して、根拠

をもって考える指導を充実することができる。

社会科学習授業デザインシート

授業者：西 竜王

大単元名	未来を支える食糧生産
小単元名	水産業のさかんな地域
本時の目標	学習問題を作り，単元の学習の見通しを持つことができる。(第2時)

1. 授業展開

(1) 導入

前時に Jamboard に立てた個人の問いをふり返ったり，仲間の問いと比べたりして，共通点や相違点などを見つける。

(2) 展開前半

羅列されている問いを分類し，自然条件や人々の工夫や努力についてこれから調べていきたいことを整理して全体で確認する。

(3) まとめ

学習問題を設定する。

2. 育みたい資質・能力

- ・水産業も自然条件を生かして営まれていることや，その生産に関わる人々の工夫や努力によって支えられていることを予想することができる。【知・技】
- ・水産業も自然条件だけでなく，そこにかかわる人々の工夫や努力があることに着目し，水産業について調べたいことを整理し，学習問題を作り，表現している。【思・判・表】
- ・水産業について予想し，主体的に学習計画を立てようとしている。【豊かな人間性】

3. 授業者より

本単元は，大単元「未来を支える食料生産」の中の小単元の一つとして構成されている。子供は水産業について学習する前に，米づくりの盛んな地域について学び，そこで働く人々の工夫や努力に着目して調べ，日本の農業の現状や課題についても視野を広げ，その課題を解決するためにはどのようにしていけばいいのかを考えてきた。水産業の学習においても，米づくりと同じ視点で，自然条件だけではなく，そこに携わる人々の工夫や努力に着目して学習問題を作成し解決に向けて，学習を進めていくことができると考える。

本学級では，仲間と共に話し合いながら問題を解決していくことが好きな子供が多く存在し，様々な教科でも自分たちで話し合いながら解決していこうとしている。その理由としても，仲間と話し合うことで，お互いに共感することができたり，自分とは違った考えに触れたりできることで，新たな見方が生まれることがあるからと答える子が多かった。しかしながら，ペアやグル

ープでは活発に話し合っているが、全体の場になると発言を控えてしまう子供もまだまだ多くいる。他にも、話し合う内容が目的とは逸脱してしまう場面も見られる。また、話は聞いている時であれば全く授業に参加せずに学習を終えてしまう子供もいる。なので、より仲間と共に学ぶ良さに触れるように授業改善を行っていき、全員が授業に参加できるようにしていきたい。

そのためにまずは、子供が主体的に学ぶために学習する教材を子供の生活の身近になるような工夫を行っていくことが大切であると考え。第一時では、子供の一週間の献立を調べ、その中で食べているものを種類ごとに分類していき、肉に比べて魚は数多くの種類が食べられていることに気付くことができるように仕掛ける。そして、なぜこのように多くの水産物が消費されているのかを考えさせる。さらに、どのような場所で多くとられているのかを地図や資料集を活用しながら、データで確認し地図上に可視化していくことで、なぜこの場所で多くとることが可能なのか、子供の「なぜ？」を多く引き出して、問いが生まれるように工夫していきたい。

また、ICT 機器を活用し、個で追究していきたい問いを Jamboard に挙げていくことで、後からも全体で共有することができるようにしていきたい。そうすることで自分の意見を中々持つことができない子供も、他者の考えを参考にしたり、刺激を受けたりすることで問いを見出していけると考える。一人一台端末を使って、集団と個がうまくつながっていくことができるように指導していきたい。そして、子供のふり返りや発言などを見取りながら、子供と一緒に学びを創っていきたい。

4. 単元計画

1. 子供が普段食べている水産物はどのような場所で取れるのか考える。
2. 子供の問いをもとに学習問題を設定する。(本時)
3. 魚をとるための漁師の工夫や努力について調べる。
4. 水揚げされた魚がどうなっているか調べる。
5. 漁港から消費者のもとにどのように届くかを調べる。
6. 養殖業で働く人々はどのような工夫や努力をしているのか調べよう。
7. 養殖についてもっと調べよう。(計画より増)
8. 水産業の変化と課題について捉えることができる。
9. 世界全体で水産資源の管理に取り組むことの大切さについて捉える。
10. 持続可能な水産業をめざして、人々が取り組む意味について考える。
11. 琉大ミーバイを通してこれからの水産業について考える
12. これまでの学習を整理し、これからの水産業について考える。